

## 初期キリスト教における労働と職業

松本宣郎

### I. はじめに

初期のキリスト教の歴史研究の一つとして、現実のキリスト教徒の社会的なあり様を明らかにすることが私の年来のテーマである。そのようなスタンスから、これまで、キリスト教徒への迫害の、ローマ帝国側の背景や、迫害に直面したキリスト教徒の対応が様々に分かれたこと、キリスト教における性意識などを取り上げてきた<sup>1)</sup>。

本稿では労働と職業という、すぐれて社会的な問題がイエスから初期のキリスト教会でどのように考えられ、また実際の状況はどうであったか、ということを眺めてみたい。すでに、初期キリスト教徒がローマ帝国の市民（あるいは奴隷）としてどのように生きていたかを描いた書物においては、労働と職業のことだから、触れずにすませる事柄ではなく、ある程度のスケッチはしてきたと思うのだが、意識的にキリスト教徒が一般帝国民とどの程度同じような、あるいはいささか異なるような労働観や職業観を持っていたのか、などの立ち入った考察はしてこなかった。それを、今回執筆の機会をお与えいただいたので、十分な文献渉猟は出来ないのだが、試みてみたいと思う。

取り上げるテーマを「労働観・職業観」とすることも考えたが、本来私が描きたかったのは、初期キリスト教徒の社会生活であった。そこで、イエスと初期キリスト教徒が労働と職業をどのような観念でイメージしていたのかを探ると共に、具体的にキリスト教徒がどのような職業に就き、あるいは忌避していたのか、をも調べてみたいと考えた。手がかりになる研究として、R.M.Grantの*Early Christianity and Society*という書物が役に立つ<sup>2)</sup>。

本書は初期キリスト教を社会的視野で取り上げたもので、それまでのキリスト教史が迫害や教義など、宗教を中心としていた状況からシフトする動向の先駆的な研究であった。キリスト教徒人口の増加、納税への態度、国家権力にどこまで服したか、などのテーマの中に「労働と職業 Work and Occupations」という一章がある<sup>3)</sup>。史料を豊富に引用しつつ、表題以外にもキリスト教徒の社会層、貧しさの捉え方、奴隷制などについても簡単に言及している。

以下、新約聖書から4世紀までの教父たちが、労働をどのように評価したかを、ギリシア・ローマの思想家たちの証言と対比させながら眺め、次いでキリスト教徒たちがどのような職業につき、

1) 松本宣郎『ガリラヤからローマへ』講談社学術文庫2017、『キリスト教徒が生きたローマ帝国』日本キリスト教団出版局2006。

2) R.M.Grant, *Early Christianity and Society*, Collins, London 1978.

3) *Ibid.*, pp.67-95.

またどのような職業を嫌ったのかを、これも非キリスト教史料をも参照しつつ探してみたい。

## Ⅱ. 初期キリスト教の労働観

勤勉に働くことをよしとするのは当然であって、歴史学の研究のテーマとしてなじむか否か、はそのようなメッセージの発せられた時代的文脈と後の時代への影響とを明らかにできるかどうか、にかかってくるであろう。まずイエスの労働観から見ることにするが、新約の福音書のイエスの言は、聖書学からするとイエス自身の言とされるものと、その後の教団や記者の加筆による言とが混在しているとされる。しかし1世紀後半以後のキリスト教徒たちにとっては、少なくとも権威ある文書として正典となっていく4福音書の中のイエスの教えはすべて真実の言葉として認識されたであろうから、ここでもそのように扱うことにする。

イエスは人の日常生活に根ざす譬えを豊富に語っている。そして、その言葉の展開される世界においては、人が勤勉に働き、その対価として賃金を得、利益を得ることは、取り立てて表現されることはなくとも、自然なことだ、とされている。彼自身「大工」(マルコ6:3。マタイ13:35では「大工の息子」と記されるほど、庶民の生活を共有していた。譬えには羊飼いがしばしば出てくる。ペトロらの漁師出身の弟子たちが彼と親しく交わる。よい地に蒔かれた種、畑を耕す、など農業への言及も労働の肯定である。ぶどうもよく出てくる。みずみずしい実、新しいぶどう酒、いずれも勤勉な労働が前提とされる。

少し異なる印象を与える譬えもある。ぶどう園の労働者の話である(マタイ20:1~16)。ぶどう園経営者が労働者を募る。夜明けから雇い始め、9時、12時、15時そして17時にも、それまで仕事にあぶれていた労働者を雇ってやった。その上で経営者は全員に同一賃金を支払った。当然夜明けから働いた労働者から不公平だと不満が表明される。経営者は「すべての労働者と契約した通りに支払っている、私が気前がいいだけのことだ」と答えた。この話は勤勉な労働をおとしめる意味をもつわけではなく、信仰次元で理解されるべきものである。人間が求める救いを決めるのは徹底的に神の方なのだ、という風に、である。このほか、主人から託された資産を運用して、銀行に預けて利子を取ることも含めてそれを増やすことが評価された話(マタイ25:14~30)もある。これも信仰次元での教訓なのだが、イエスの譬えには、後に見るアリストテレスなどの商業や高利貸しへの嫌悪感は薄いように思われる。

要は、イエスは神の国を宣傳伝え、信じる者には罪の悔い改めと救いへの希求を強く求めたが、社会における生き方については、これまで通りのまっとうな、つまりきちんと労働して生きるたずきを得つづけることをよしとしたということであろう。そのことは、イエスの「働く者が食べ物を受けるのは当然である」(マタイ10:10)という言葉によっても裏づけられ、記憶されている。これらのイエスの言葉は、1世紀後半のキリスト教成立以後、確立してゆく新約聖書の福音書や教父たちの文書の中で、「山上の説教」などの多くの教えと共に受け継がれ、守られてゆくのである。

次に、労働に関して証言の多いパウロを見たいが、その前にユダヤ教の労働観はどうであったか。旧約諸文書には様々な言及があり、中には「コヘレトの言葉（「伝道の書」）」のように人の労苦に空しさしか見出さない文書もありはするが、基調は土地を耕し、家畜を養う、堅実な生き方が教えられ、守られてきたとあってよい。モーセの十戒の、「六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ」はその勤労を命じる黄金律であった。少数民族として、国すら失いながら民族としてのアイデンティティを失わず、パレスティナから地中海世界全体に広がる希有の一神教を奉ずる民族となった彼らは、すぐれて労働熱心な民であった、としてよいであろう。イエスの時代の「ミシュナ」やヨセフスに労働への愛が喚起されている<sup>4)</sup>。

しかしながら、もちろん他の民族がユダヤ教徒に比して皆怠惰であったはずはない。ギリシア・ローマの思想における労働についての意見は後で見ると、ユダヤ教徒に対して、ローマ人史家タキトゥスが彼らを怠惰な民だと決めつけているのは興味深い。それによると「(ユダヤ人が) 七日目ごとに休日をとることにしたのは、七日目に彼らの試練が終わったからだといわれている。その後、安逸の魅力に誘惑され、七年ごとに仕事を怠けることにしたという」<sup>5)</sup>。いわゆる「ヨベルの年」を指したものと思われるが、「レビ記」(25:8) によるなら「50年に一度」であってタキトゥスの誤解である。ただこの箇所でもタキトゥスはユダヤ人に関して詳細な叙述を行っていて、1世紀のローマ帝国人の興味と認識がかなりのものであったことを示している。タキトゥスと同時代の皇帝伝作家スエトニウスにもユダヤ人を社会に不穏な要因をもたらす存在とした記述があり<sup>6)</sup>、ローマ帝国社会に反ユダヤ意識が広がりつつあったことを示している。このような意識がユダヤ教徒の一派と見なされたキリスト教徒へのローマ帝国社会の反感の前提となった、とも推測されるだろう。

さてパウロと労働の関わりである。彼の場合、労働を奨励するというより、彼自らが休むいとまなく生涯働き続け、またそのことを語り続けた、というところに特徴がある。「使徒言行録」には元々の職業であるテント職人としての労働と、後半生の専門業となる福音伝道の働きが詳細につづられている<sup>7)</sup>。また彼の書簡からは、その労働観がうかがえるのだが、イエスの例と同じように真正のパウロ書簡は限定される。しかし2世紀以後のキリスト教会においては厳密な著者の区別はなされなかっただろうから、ここでもそのままパウロの言として受け取っておきたい。

パウロはコリントやテサロニケなどの教会への伝道のために日夜働きに働いた。時に彼はそれを苦闘とも捉える。「今の今までわたしたちは、飢え、渇き、着る物がなく、虐待され、身を寄せる所もなく、苦勞して自分の手で稼いでいます。」(Iコリント4:11f) また自らの働きの実りを喜ぶこともある。「わたしたちがあなたがたのところで、どのようにあなたがたのために働

4) *Ibid.*, pp.66f. ヨセフス『アピオン駁論』II, 174. 234. 291。

5) タキトゥス『同時代史』5, 4。國原吉之助訳。

6) スエトニウス『ローマ皇帝伝-クラウディウス』25。ローマ帝国下、ユダヤ教徒が置かれていた状況について、以下を参照。W.H.C.Frend, *Martyrdom and Persecution in the Early Church*, Oxford 1965, pp.31-78

7) 「使徒言行録」9章以下。

いたかは、御承知のとおりです。そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至ったのです。」(Ⅰテサロニケ1:5-7)

パウロはこのように生きること即労働、と自ら認める人物であったように見える。彼はテント造りという職を手につけていたから(使徒18:3)、「働かざる者食うべからず」(Ⅱテサロニケ3:10)の格言の実行者であり、またそれを他者にも求める人であった(同所)。しかし彼の実際の労働は、人生のある段階からキリスト教の伝道となったから、彼にとってその労働は単なる生活の手段ではなくなったであろう。

パウロの労働への意欲は強く、彼の言は自ら身を粉にして働くという、実体験に根ざした説得力を持つ主張であった。では彼の生活の支えは何であったのか。各都市を相次いで旅していた彼だが、コリントでは友人アキラらと共にテント造りで稼いでいたと語る(使徒18:3)。また経済面で他者の助けはえなかった、とも言う(同20:33)。しかし、歴史的事実としては、都市の初期教会に徐々に信者数が増えてきたパウロの時代、専従の伝道者は滞在する都市の信者の家に止宿したり、他の都市に向かう旅費を提供されるなど、手当てを得る状況になっていたのではないかと想像される。1世紀後半の教会を反映する「使徒言行録」と「ローマ書」「フィリピ書」などにはすでに使徒、監督、執事などの教会の職制の萌芽が見いだせる。次第に給与等の支給も定められたのであろう。献金も有力教会では多額になり、他都市の教会に送金する例も知られるから(使徒11:29f.)、使徒たちの旅費も支給されたであろう。やがてキリスト教会には司教を頂点とする職階が整い、「聖職」という観念が生まれるのである。これらはユダヤ教の祭司やローマ多神教の神官団をモデルとしたとも考えられるが、神に仕える労働を「聖なる職」と認識する観念はキリスト教特有のものと言えるだろう。

ところで、パウロが労苦を強調する文脈には当時の特定の都市の教会の党派的な状況が存した、と指摘されている<sup>8)</sup>。二つの都市の教会にそのような状況があった。

まずコリントである。経済的にも繁栄していたこの都市のキリスト教徒はかなりの数に上っていたと思われる。それだけにパウロが伝えようとした福音とは異なる信仰を標榜したり、キリスト教そのものに乗っ取ろうとするグループもあったようである。後者がグノーシスの一派と思われ、世界の最上位に抽象的な知恵という絶対存在を想定する彼らは、思索を重視して実際的な手のわざを下位に置いた。グノーシスの観念においては、世界を創造したのはデミウルゴスなる神的存在だが、最高神ではないのである。そのような人々を意識したパウロはコリント信徒への書簡においてしばしば攻撃的な論調をとり、自分はキリストの使徒として福音宣教のために全力で働いた、しかし当然受けるべき報酬を受け取ることはしなかった、と言いつつのである(Ⅰコリント9)。日常的な真摯で勤勉な働きこそが価値あることだ、と言うのである。

もう一つの都市はテサロニケであった。コリントとは違い、ここの信者はむしろ信仰に執着す

8) Grant, *op. cit.* pp.68-71.

るあまり、キリストの再臨が近いと思ひ込み、仕事をおろそかにするに至っていたらしい。パウロははやる子供を諭すように「主の日（終末）が、盗人のように突然あなたがたを襲うことはないのです。」（Iテサロニケ5：4）と言い、日々労苦することを尊び、怠けている者たちを戒め、「いつも善を行うよう努めなさい」と勧めるのである（同5：12～15）。

ともあれパウロの労働への姿勢は一貫している。倦むことなくたゆまず働くべし。その働きは彼自身の場合には伝道という営為であるが、自身体験してきた手の技など肉体の労力も含む、食うための労働、を極めて大切なこととして他者に強く勧めるのである。

イエスとパウロのこのような、日々の勤勉な仕事を評価する労働観は、2世紀以後の教会学者（教父）たちにも受け継がれた。1世紀末にローマ教会にいたクレメンズに帰せられる書簡には「良き働き人は、欣然として自分の労働の糧を受け取る。怠惰でなげやりな者は、自分の雇い主の顔をまともに見られない」（コリントのキリスト者へ 34, 1. 小河陽訳）などあり、全体に誠実で真摯な生活を勧めている。2世紀前半のイグナティオスも（ポリュカルポスへの手紙1, 3など）、同じ頃の成立とされる『ディダケー（十二使徒の教訓）』（12～13）も、働くことをよしとし、あるいは人の義務としてこれを求めている。

やや余談めく記述をエウゼビオスの『教会史』（4世紀成立）に見出すことが出来る。ドミティアヌス帝の時代、イエスの一族の末裔が皇帝の前に呼び出され審問を受けた。彼らは、自分たちは肉体労働をなりわいとしている者だ、とそのあらくれた手を証拠に示したという。皇帝は彼らの信仰の告白を訊いた後、無価値なもののみなして釈放したのだが（Ⅲ, 20）、キリスト教の伝承の中で、農業か手仕事か、ともかく庶民の労働が当たり前のこととされているところが面白い。因みにこのドミティアヌスの伝承は史実とはされていない。

2世紀の教父、ローマのユスティノス、ギリシアのアテナゴラス、さらに3世紀アレクサンドリアのクレメンズにも手仕事への礼賛や、農耕用具や船具の喩えなどが散見される<sup>9)</sup>。最初のラテン教父とされるカルタゴのテルトゥリアヌスがとりわけ熱心な働き人としてのローマ帝国下キリスト教徒の像を強調する。彼はキリスト教徒に対する多神教徒市民とローマ帝国都市や皇帝の厳しい視線に対して、キリスト教徒は帝国中に存在して、良き市民としてあらゆる分野で働いている、と言う（『護教論』42）。テルトゥリアヌスの主張の趣旨は、キリスト教徒は迫害されるような犯罪者集団ではない、れっきとしたローマ市民であり、今やあらゆる都市、田園に、そして社会層に広がっている、というもので、そのキリスト教徒はどのような職業についていたのか、という本稿第IV節のテーマでまた取り上げたい。

3世紀以降のキリスト教規範文書やギリシア教父にも、パウロの影響を受けて、熱心な労働と手の仕事への評価の言葉が見いだせる<sup>10)</sup>。このような労働観が初期キリスト教の基本観念となっ

9) *Ibid.*, pp.76.

10) *Ibid.*, pp.77. *Didascalia Apostolorum*, (『使徒憲章』3世紀) 及び *Constitutiones Apostolorum*. (『使徒戒規』4世紀)

たと言えるだろう。次に、彼らの勤勉な労働、就中手の労働への高い評価は古代地中海世界の労働観と同じであったのか、異なる特性をしめしたのか、を見ていきたい。

### Ⅲ. ギリシアとローマの労働・職業観

ホメロスとヘシオドスから最初の情報が知らされるギリシア人の労働観が、労働をきらい怠惰を勧めたとは思えないが、そのニュアンスにはキリスト教のそれとのずれも見いだせるようだ。

前7世紀頃のボイオティアの詩人ヘシオドスがギリシア文学史上最初の作品を著したとされる。彼自身農耕を行っていて、詩の底流には兄弟との財産上の争いがあったと言われる。自分の財産をかすめ取ろうとする兄弟に、怠けて富を得ようなどと考えるな、私のように汗水流して働いて、その実りを得るようであればならない、と教訓を与えるのである。彼は確かに労働を苦しみと見てはいるが、それでもその歌は、天空の星の動きで畝起こしや種まきの時を知り、作物を収穫する、そのような労働の喜びをも表現しているように思われる。

ギリシア人は農牧を基本とし、商業をも発展させて、市民が自立して構成員となる都市国家を作り上げた。市民としての意識の高い彼らは、自ら労働することを当然とし、またそのことに誇りも抱いていたであろう。アテネやコリントなどの商業と手工業の発展した大都市では民主政の発展で、農牧より軽く見られがちであった手工業や商店主の層の市民も政権を担うようになったから、労働への評価は低いままではなかったと思われる。

都市国家繁栄の古典期、前5世紀の、悲劇などの文書史料には労働する市民の活躍の姿は見られても、表だって労働を称える言葉を見出すことは難しい。ただプラトンの対話編にソクラテスたちの労働談義は散見される。そのソクラテスは、本来の生業はともかく、兵士として戦地に赴いたときは良き兵士として戦った、と言われる。市民としての義務を果たす意識の高い人であったことは、その従容たる死の逸話からも知られているが、彼の後半生は、もっぱら市民たちとの対話の生活であって、生活の資を得るための労働はなさなかった。そしてプラトンによって伝えられるソクラテスらの対話においては、単純労働を行う手先の技術というのは、高度な思想によって得られる本質的原理を知らなくてこなせることだから、思索や哲学よりも下等だ、と断じられるのである（『国家』IX, 590c）。ソクラテスが生活の資をどうやって得ていたのかは、たとえば対話相手の富者の支援があったのではないかと想像するほかはないが、彼が手先の技術で稼いでいる市民とも付き合っていたことは事実のようで、そのような労働を蔑むようなことをソクラテスが考えていたわけではない<sup>11)</sup>。しかしながら、知的営みを肉体労働の上に置く思想はアリストテレスによってより明確にされる。『形而上学』においては建築を例に出し、建物の全体像を構想する設計家の方が実際に働く建築士よりも優れた存在だ、としているのである（981a24ff）。もっとも、『政治学』においてアリストテレスは、富を得るための獲得術を論じるが、まっとう

11) 桜井万里子『ソクラテスの隣人たち』山川出版社 1997.

な職業の、「自然にかなった」方は評価するが、貨幣経済の広がりや儲ける傾向が出てくると「商人的な取財術」というものが現れ、これは得る富に際限がなくなるから甚だ良くない、という論議をしている(1256a~1258a10)。「自然にかなった」職業というのは、「牧畜者、海賊(ママ)、漁夫、狩猟者、農夫」(1256b. 山本光雄訳)とされる。後段の文脈からすると靴などを作る手工業者もこれに入るようである。このテーマは、初期キリスト教が忌避した職業、と関わることとなるので、次節で取り上げたい。

ローマ人の考えを見てみよう。ギリシア人よりも实际的で現実的であったとされる彼らだから、やはり勤勉さをうたう者は多い。早い例は前2世紀の大カトーである。元老院議員で大土地所有者であったカトーはローマ人の質実剛健で勤勉な生活を自ら実践して、農場経営にも携わり、他の市民に対しても同様の生活を求め、奢侈を禁止する提案などを行って嫌われた、などとプルタルコスのカトー伝が記している。このほかにもローマでは、たとえば伝説的な英雄キンケンナトゥスが戦場で指揮官として勝利をもたらして凱旋しても、普段の生活は自分の畑で野菜を育てていた、などの話が好まれるような文化があった。もちろんローマの帝国化に伴って、属州からの搾取と大量の奴隷使役がローマ市民の生活を豊かに贅沢にしていたのだが、一部の知識人は古き良きローマ理念として、カトー的な生き方を称揚していた。キケローにもそれは感じられる。これは前1世紀から彼らを捉えたストア哲学の影響があるだろう。後1世紀、ウェスパシアヌス帝に仕えたこともあるムソニウス・ルフスは、書物は残していないが、勤勉な生活を説き、女性が行う手仕事すら称賛したという<sup>12)</sup>。ムソニウスの哲学はセネカやエピクテトスにも共通する、あるいはそれに影響を与えるものであったろう。時代はやや飛ぶが、後2世紀のストア哲学者マルクス・アウレリウスにも、「お守り役からは、……苦痛に耐えることを、僅少のものだけを必要とすることを、自分の手を使って労働することを……(学んだ)」(『自省録』I, 5. 水地宗明訳)などの表現が出てくる。さらにスエトニウスの『ローマ皇帝伝』には、アウグストゥスは、大宮殿は営まず、皇帝としての任務を忙しくこなしていたとか(アウグストゥス33.「休まず出廷し、時には日没まで立ち会い、体が耐えられない場合、裁判官席の前に臥腰をおかせ……」國原吉之助訳)、ウェスパシアヌスについても同様のことが記されている。これはトラヤヌスやハドリアヌスについても伝えられているところで、総じてローマ皇帝は、皇帝としての務めに関しては誠実・勤勉に果たしていたことはある程度事実としてよいであろう。

このようにローマ人の労働への評価はイエスとパウロの教えと隔たるものではなかったのである。ただ、この二者の間には労働の具体例についてかなりの違いがあることも指摘されねばならない。

それについては小プリニウスの証言が示唆を与える。彼も、その伯父である大プリニウスが実

12) Grant, *op. cit.* pp.74.

に勤勉に、ローマ海軍提督として働き、また博物学者として研究にいそしんでいたことを語っている（『書簡』Ⅲ，5）。しかし、騎士身分であり軍の指揮官という立場にあった大プリニウスの「労働」は一般市民のそれではない。ということはすでに多くを紹介したローマ皇帝たちが励んだ「労働」も皇帝としての公務であって、手先の仕事や筋肉労働ではない。つまり、権力をもつ者の中に労働熱心な者がいるのは事実として、それは権力者が担う種類の労働である。この点でイエスとパウロの勤める労働とはあきらかに異なっている。

そこで小プリニウスであるが、彼も一時属州総督として同様の権力業務に精励したことは間違いない。彼の『書簡』第10巻はその任務の記録でもある。この任務の一環として彼は小アジアの都市でキリスト教徒裁判を行ったことはあまりにも有名である。その他の巻の書簡は彼の友人たちのこと、家族のこと、彼の所有するウィラや農園経営のことなど多岐にわたる。従ってこれはローマ帝国盛期のローマ人の生活のリアルで貴重な史料であり、多くの研究に利用されている。我が国では弓削達『素顔のローマ人』が代表的なものである<sup>13)</sup>。要は、小プリニウスは地位も権力も皇帝の比ではないが、富裕な元老院議員貴族であり、公務も担ったが、そもそも元老院議員の公職に手当は出ず、彼の生活はイタリア各地にある広大な土地所有によっていたのであり、いうならばそれら大農園からの収入で支えられていた。農園の労働も、その経営も使用人に委ねていた。彼の日常は、公務の合間の「閑暇」を楽しむことで費やされた。それは友人や芸術家との談笑、自らの詩や書簡の朗読会、などであった。ただ、彼は使用する奴隷の農園管理者や労働する自由人農民の働きを良好に行わせることに心を砕く所有者ではあった。その限りでの労働への評価であったのだ。

これに対し初期キリスト教は、自らの手で、汗を流し、労苦して働くことを直接的に評価したのである。これは、ギリシアとローマの、知識人たちの労働観とは明らかに一線を画するものであった。

#### IV. 初期キリスト教の職業観

前節で記したように、ギリシアとローマの観念において、ことに初期キリスト教が生まれたローマ帝国の社会通念において、労働自体は当たり前に励むべきことと考えられていたが、エリート層の間では、農耕はともかくとして手仕事や筋肉労働を卑しいものと見なしていた。もっともローマの史料は政治的・社会的エリートのものに限定される。庶民の感覚は、ユウェナリスあたりから窺うしかない。彼の諷刺詩で紹介される実に雑多な庶民のことばかり見るに、生活は貧しく、酒や賭け事に溺れはするが、日々の仕事は稼ぐためにやめるわけにゆかない、という思いを彼らは抱いていた、というところであろう<sup>14)</sup>。

13) 〈生活の世界歴史4〉河出書房新社1975.

14) 『サトゥラエ 諷刺詩』。



このような社会の中で、イエスとパウロは労働に差別感を示さなかった。イエスはユダヤ社会では一般に評価されなかった徴税人と娼婦にも他の者と平等に接した、と福音書に印象深く記されている（マタイ9：9～13、ルカ8：2）。パウロは自ら職人として生活の資を得ていたことがあり、労働全般に対してこれを見下す意識があったようには見えない。

このような労働観はその後のキリスト教会においてどのように展開していったのか、を見てみたいが、職業についてのキリスト教的な特異性が現れてくることが興味深い。

まず、初期キリスト教徒がどのような職業に就いていたのか、である。イエスの弟子たちとパウロたちのテント造りなどについてはすでに述べたが、その他とその後のキリスト教徒たちがどんな仕事をしていたか、という問題は、初期キリスト教がローマ帝国社会のどの階級あるいは社会層に広がっていったのかという、より広い問題につながり、後者に関しては夙に研究されてきているが、なかなか難しい問題である。そのような研究では初期キリスト教徒は1世紀半ばから2世紀、東地中海の都市と、西はローマ市の中産層から下層に信者を獲得した、農村への進出は2世紀後半からのこと、元老院議員や騎士といった上級身分にはなかなか受け入れられなかった、かつて信じられたほど奴隷の信者は多くなかった、という見方が通説と言えよう<sup>15)</sup>。

このように社会層に視点をしぼると、初期キリスト教徒がついていた職種などはあまり顧みられない。ただ、ミークス(W.A.Meeks)というアメリカの新約学者がパウロが関わったローマ帝国東方都市のキリスト教徒について社会学的研究と題する書物を書いている<sup>16)</sup>。彼は、最初の教徒は下層自由民とするDeissmann、中産以上とするGrant、ローマ社会を映して教徒も階層化していたとするMalherbeやTheissenなどの諸説を紹介してから、新約のパウロ書簡で言及される65名、同様に「使徒言行録」言及の13名についてその社会における立場を調べている。

それによると、やはり具体的な職業が明記された者は極めて少ない。最上位層の人物として、パウロが魔術師を圧倒した出来事に感じあって信仰を持つに至ったキプロス州総督セルギウス・パウルスがいるが、実在性はうすい（使徒13：7）<sup>17)</sup>。その他ではコリント市の経理係とされるエラストがいる（ローマ16：23）、史実とするなら、都市の公職であり、一般市民の上の身分ということになる。またギリシアのフィリピでパウロから洗礼を受けたルデヤはティアティラ市出身の紫布商人といわれ（使徒16：14）、パウロの手紙を筆記したテルティオは代書人という職業ではなかったか、とされる（ローマ16：22）。あとはテント造りのプリスカとアキラ（使徒18：2f.）、そして医師のルカ（コロサイ4：14）、ここまでである。その上でミークスは、パウロ伝道圏のキリスト教徒の総合的な印象を述べる。要は、都市のやや上層と思われる豊かな経済状況の人々が主流を占める、というのである。ルデヤもおそらく富裕な商人であろうし、パウロの同行者バルナバは所有地を売って献金する資力のある人で（使徒4：36）、テサロニケのヤソンは伝

15) 上記注(1)所掲拙稿に加え『キリスト教の歴史1』〈宗教の世界史8〉山川出版社2009、1～2章。

16) W.A.Meeks, *The First Urban Christians, the Social World of the Apostle Paul*, Yale U.P., New Haven 1983. ウェイン・A・ミークス 加山久夫監訳『古代都市のキリスト教—パウロ伝道圏の社会学的研究』ヨルダン社 1988。

17) 参照、田川建三『新約聖書 訳と註』2下「使徒行伝」作品社 2011、340。

道者に自宅を宿泊に提供し、保証金も負担した（使徒17：1－9）、等々その例は多い。

これらパウロに接した人々の職業は十分知り得ないとしても、想定して確実なこともある。ローマ帝国社会に特徴的な「富裕な解放奴隷」がその一部である。アリストプロ家とナルキソの家の人々（ローマ16：10f.）などがそれである。その中には皇帝周辺の有力者の家人として、執事的な仕事をしていたと思われる者もいただろう。ローマ帝国社会においては奴隷が多いた一方解放も盛んであった。彼らは市民権を得て、富者を主人としていた者はかなり豊かな人々であったし、その出自から知的能力の高いものも少なくなかったが、社会的に地歩の弱さを持ってもいたから、キリスト教への親近感を抱きやすかった、と想像される。ローマ市にはことに解放奴隷が多く、教会のリーダーとなった教父、たとえばクレメンスなどは、仕えたローマ人の家名を名乗ることの多い解放奴隷のひとりと想定出来るかも知れない。しかし彼らの「職業」は、その主人の職種ともかかわり、特定は難しい。

初期キリスト教会における女性はかなり多かったと思われる。一般社会に比べて男女の差はより小さく、保守的な家から出てキリスト教にふれた彼女らは教会に親和性を抱くことになったろう。多くの女性は都市の中産の家の出であっただろうが、その職業についてはプリスカからの例外を除いて、不明と言うほかはない。

また、バルナバなどは、都市に住んで田園に土地を所有する不在地主で、農産物で利益を得ていたかも知れない。また奴隷とキリスト教については社会史研究上から近年注目されているテーマである<sup>18)</sup>。女性の場合と同じでどんな労働に携わっていたか、は新約文書においては明らかでない。ただ、奴隷キリスト教徒の存在は「フィレモンへの手紙」に登場するオネシモなる逃亡奴隷として確認され、パウロの奴隷一般への勧告（Iコリント7：21）からしても明らかである。しかし奴隷は教会において自由人と平等とされていたであろうが、所有者のもとから自由な信仰行動をとることは困難であっただろうから、その割合を過大に評価することはできない。

さて、パウロの時代以後、2世紀からのキリスト教徒はどのような職業につき、またそれら職業をどのような観念で捉えたであろうか。

信者の増加はそれほど急ではなかったと思われる。少しずつ増えていったとは思われるが、考古学や古代美術面での証拠が3世紀まではほとんどない。他方文献史料では2世紀から徐々にキリスト教の教父たちの活動が目立ってくる。それに伴って教徒の労働への言及も現れてくる。ローマ人作家の証言も、タキトゥスの、ネロ帝のときのローマ市大火後に行われたキリスト教徒への迫害の記事（64年。『年代記』15, 44）を初めとしてスエトニウス、そして小プリニウス、と1世紀末から2世紀にかけて、少しずつ増えてくる<sup>19)</sup>。最も詳細長文の情報を提供してくれるの

18) e.g., J.Scheele, *Zur Rolle der Unfreien in den römischen Christenverfolgungen*, Diss.Tübingen 1970, 島創平『初期キリスト教とローマ社会』新教出版社 2001, 129-158。

19) R.L.ウィルケン 三小田敏雄・松本宣郎他訳『ローマ人が見たキリスト教』ヨルダン社 1987（原著1984）参照。

は小プリニウスである。彼が小アジア北西端ポントスの属州総督のとき、現地で要請されたキリスト教徒の裁判に関してトラヤヌス帝に指示を仰いだ書簡の一節は、2世紀初頭のその地のキリスト教徒について、「すべての年齢、すべての身分、男女両性の多くの人びとが現に訴えられつつあり、これからも訴えられることでありましょう。じっさい、都市ばかりではなく、村々にも、いやそれのみかさらに草深い田舎にも、この迷信の疫病は広がっているのです」と記している（『プリニウス書簡』96, 9. 弓削達訳）。ここには多少の誇張もありそうだが、パウロの時代から教会のあったエフェソスなどのギリシア都市が近いポントスには、かなりのキリスト教徒がいたことが窺われる。彼らは堅実な、労働する地方都市市民であったろう。しかし職業は不明である。

2世紀のもう一人の、おそらくはアレクサンドリアの人で哲学者ケルススが初めてキリスト教徒の社会層について、侮蔑的ながら具体的な証言を提供する。因みにケルススという人物は『真正な教え』という書物でキリスト教徒を激しく糾弾したという。その書物は現存せず、3世紀のキリスト教教父の大学者オリゲネスが『ケルスス駁論』という書物でこれを逐一引用しながら反論しているので、その存在が知られるのである。そのケルススが、「毛織物職人や靴職人、洗い張り屋、その他のおよそ教養のない粗野な者たちが」子供や無知な女たちに伝道している、と擲論したとされる（3巻55出村みや子訳）。オリゲネスはこれに対し、伝道するのは節度も教養もある教師たちだと反論するのだが、毛織物職人などの仕事をするキリスト教徒がいない、とは言っていないようである。

キリスト教の史料には思いのほか教徒の職業についての言及が乏しい。2世紀末カルタゴの最初のラテン教父テルトゥリアヌスがようやく具体的な例を挙げてくれる。もっとも、その半分は本稿最後に触れる、キリスト教が忌避した職業に関するものではあるのだが。それでも彼は主著の『護教論』で、キリスト教がローマ帝国に広く浸透していることを強調して、次のように記す。まず「大きな都市や、団地、城塞、町や村、広場、戦陣、部族、十人組、王宮、議会、市場などあなた方のおられる所はみな、キリスト教徒でいっぱいである」（37.4 鈴木一郎訳）と言い、「あなた方の広場や市場や浴場や小料理店や、商店や、はたご屋や、……その他取り引きの場所にも行かないわけではない。……われわれは船で旅もするし、あなた方とともに軍隊にも行くし、畠も耕せば、商売もする。更にあなた方と技術の交換もしている。私達の労働もあなた方に利用してもらっている」（42, 2. 3. 同）と付け加える。キリスト教徒は今や普通にローマ帝国都市市民として存在し、様々な職業について働いていたとしてよいであろう。

このほかは断片的ではあるが次のような例をアマンの概説が挙げている<sup>20)</sup>。2世紀半ばローマでユスティノス（この人物自身哲学者として生活していた）と共に殉教したエウエルピストスは皇帝の宮廷の奴隷であった（「ユスティノスと仲間の殉教」）。177年リヨンで殉教した教徒の一人アレクサンドロスは医師。アフリカの護教家テルトゥリアヌスとミヌキウス・フェリクスは元来

20) A.アマン 波木居斉二訳『初代キリスト教徒の日常生活』ヨルダン社 1978（原著1971）、74以下。

法律家。217年からローマ司教となったカリストゥスはかつてローマの銀行家カルポフォルスの奴隷として業務に携わっていた。因みにカリストゥスはその後横領の罪で捕縛され鉱山労働の刑を受けたが、コンモドゥス帝の妃マルキアのおかげで恩赦となり、その後司教となったという逸話はよく知られている (Hippolytus, *Philosophumena* 9, 11f.)。

このように初期キリスト教徒たちはローマ社会の中で普通に働いており、身分や階級、男女の別なく入信したのと同様、どの職種にもついていたように (少なくとも2世紀までは) 思われるのだが、2世紀末以降のキリスト教文書に、教徒なら忌避すべき職業が挙げられるようになってくるのである。ところで先に本稿で、ギリシア、ローマの上層や知識人には手先と肉体を要する労働を侮蔑的に見る証言の多いことを指摘した。上層市民は (彼らが担う) 公務や所領経営には価値を見出していた。軍務もこれに加えられるかも知れないが、上層市民にとって兵士一般の戦闘などは考慮の外で、指揮官としての軍務しか念頭にはなかったのではあるまいか。要するに彼らの証言は、働いて稼がなくは生きられない、貧しい連中の労働を侮蔑するものであったのである。そのような彼らの労働観を瞥見するために、ローマ知識人の代表であるキケローとセネカの蔑んだ職業、を見ておこう。

キケローは医術、建築、高貴なことの教育など、公共の利益をもたらす技術をもって働く者は名誉を得る、規模の小さい商業は卑しいが、大規模で諸方から物資をもたらして誠実に人々にわかたつなら非難されるべきではない、と言い、結局田園の地所に居住して耕作することが最も自由人にふさわしい、と語る (『義務について』第一巻42 (151)。泉井久之助訳による)。この言葉に先立って彼は、「手わざや営利の生業について、……まず第一にひとに憎まれ、よしとせられないのは、たとえば収税人、高利貸」、技術ではなく労力を買われる雇い人も卑しい、また「即座に売りさばくためのものを大口の商人から買い入れるひとたち」、「手職のひと」の職場には何も高貴なものがありえない。「もっとも」尊敬に値しないのが人の快楽に仕える商売であって、「魚うり肉屋料理人、腸づめづくりにさかな取り」(テレンティウスを引用)……これに香油屋、舞踊手、……骰子のあそび」(同書第一巻42 (150)) と、卑しい職を列挙している。その他、彼は気に入らぬ人物ウェンティディウス某を「驟馬追いふぜい」と軽蔑的に評する (「縁者・友人宛書簡集」10, 18 <岩波『キケロー選集』16では395 (278頁)> 大西他訳)。当人が実際に驟馬を扱う仕事をしてきたとの訳者註もあるが、この表現はローマ人の間ではよく蔑みに用いられるものでもあったようだ<sup>21)</sup>。

キケローの百年後のストア哲学者セネカも職業の格差付けを語っている。ある書簡の中で彼は前2世紀ギリシアのストア派ポセイドニウスの説として、技術と称して4つの職業を提示する。下から始めて第一は平易で低級な技術、これは職人で日常生活用品を作る仕事で、優美さも高貴さもない。第二は遊びのための技術で、舞台道具の機械仕掛けなどを作る仕事。第三は子供の

21) Grant, *op. cit.* p.82.

教育の技術で、初等教育にあたる。そして最高の自由な技術は「徳」に関わるもので、哲学の教師などが想定されているようだ。

このほかもっと具体的には高利貸しや船乗り、床屋、広場での食物売り、などが低く見られる職業であったことがローマの詩や劇から知られるし、ユダヤ教の文書にも同様の職業観が見いだせる<sup>22)</sup>。

このようにローマ帝国社会では、貴族や知識人から軽侮される職業は多くあり、それらには、先に述べたようにある種の共通点があった。しかしながら、それらの職業につくことが法で禁じられていたわけではない。仮に上層の市民が窮乏して、その種の職で生活することになったなら軽蔑されるか、精々の所同情されるくらいであったろう。例外があったとすれば、魔術使いと見なされた古い師や祈祷師が、一貫してではないが、時に弾圧されそれらを職業とすることが禁止されたことであろうか<sup>23)</sup>。

さてキリスト教については全く異なる傾向が現れてくるのである。つまり、キリスト教の広がり一定程度以上となり、教会の制度が整い、帝国内各都市の教会間の交流が進み、教理論争などが深まった状況を反映してであろうが、教会文書が多くなり、その中に教会規則の類も見出される。そこに明確な「就業禁止職業」が示されるのである。その時までには、上述のようにローマ帝国社会では侮蔑されていた大衆が担う労働にキリスト教徒は就いていたし、パウロや教父たちに職業の貴賤を問題とする意識もなかったと思われる。それが一転して就業禁止職業を提示するに至ったのである。知られうる最初の文書はヒッポリュトスの名で伝わる『使徒伝承 *Traditio Apostolorum*』である<sup>24)</sup>。成立は3世紀初めとされる。この伝承の第16節に、教会に入りたい者が次の職業に就いていたなら辞めなくてはならない、と記される。以下に掲げる。

売春宿の主人、彫刻家・画家（偶像を作るならば）、俳優または劇場で見世物を演じる者、子どもたちに教える者（辞めるほうがよいが他に仕事がないなら許される）、競技に出場する御者（勝負事に参加する者も）、剣闘士とその指導者、闘獣士、剣闘士の勝負事に関わる役人、偶像に仕える祭司、兵士（人を殺すならば）、武力を握っている者、緋の衣をまとった市の行政官、売春婦、好色者、男色の相手になる者、その他口にできぬ行為をなす者、魔法使い、魔術師、星占い師、夢判断師、香具師（民衆扇動家？）、貨幣の縁を削る者（貨幣に加工する不正）、護符の製造人。

1世紀から教会は様々な人々を受け入れて行く中で、忌避せざるを得ない人々の存在に問題を感ずるようになったのであろう。かかる禁忌の制定が求められたのはある意味でやむを得ぬものであった。この『使徒伝承』の禁止項目はまだ十分なものではなかったと思われるが、キリスト教の信仰面からして理解できる項目である。柱は二つで、多神教信仰とそれに伴う偶像崇敬に関わる職業への拒否、そして性や賭け事、残虐さへの嗜好などの人間的快樂に関わる職業への拒否、

22) *Ibid.*, pp.81. 参照R.MacMullen, *Roman Social Relations, 50B.C.to A.D.284*, Yale U.P.1974.

23) 参照、松本『ガリラヤからローマへ』第五章「魔術師としてのイエス」。

24) 『聖ヒッポリュトスの使徒伝承』土屋吉正訳 燦葉出版社 1963.

である。彫刻家らは偶像と、俳優などの見世物に関わる職業は客の快樂の喚起と結びつけて嫌われたのであろう。「緋の衣をまとった市の行政官」とは、属州の都市のエリート市民が担う首長(通例二人)を指すかと思われ、都市の行事で祭儀を行うなどローマの神々や皇帝礼拝に関わるから忌避されたのであろう。しかし3世紀初めにキリスト教徒がこれら要職につく市民に改宗者を見出していたか、は疑問ではある。

他の史料と矛盾を感じさせるものもある。兵士であってはいけない、とある。実はパウロから、使徒教父クレメンス、イグナティオス、教父ユスティノスまで、教会の代表者は意外にローマの軍隊に違和感を示さない<sup>25)</sup>。ローマ軍兵士キリスト教徒が2世紀以降いたことはテルトゥリアヌスの証言(『護教論』42, 3)からしても事実だと思われる<sup>26)</sup>。また「子どもたちへの教育」が忌避される理由もよく分からないところである。ストアのセネカが初等教育を低くみていたとは先に紹介した通りだが、それは哲学までは教えないという程度のことで、キリスト教の場合は想像するしかないが、都市の広場の寺子屋のような場所で、神話を題材に教えるようなことが嫌われたのであろうか。ここで想起されるのは、キリスト教が公認された4世紀に一時的に異教反動策をとったユリアヌスが、キリスト教徒が学校で文法・修辞学・哲学を教えることを実質上禁じたことである<sup>27)</sup>。ユリアヌスの場合、学校は中・高等教育の学校ではあったが、いささか興味深い。

『使徒伝承』の、司教など教会職制についての整った叙述に比して、これらの職業忌避の項目はやや粗雑ではあるが、『使徒憲章』『使徒戒規』もほぼこれにならったものである<sup>28)</sup>。これまでの経緯からして忌避されて不思議はない「徴税人」と「高利貸し」が挙げられていない。そして、その実効性について疑問も生じてくる。そもそも現にこういう仕事をしている者がキリスト教に改宗するに際して廃業を条件とされるというのは無理な話のように思われる。教会が強力になって、献金によって財政基盤を確たるものとしていたなら、教会自体が雇用しうる人材もありえただろうが、むしろこの職業の排除は、他の規定や戒規に比べてそれほど厳密には守られなかったのだろう。それというのも、兵士キリスト教徒は3世紀以降も存在し続けたし、「子どもたちに教える者」も同様だったであろう。ユリアヌスが彼らを排除したということは、その時代まで彼らキリスト教徒が学校で教えていたからこそのことだからである。

テルトゥリアヌスは『見世物について』という書物を著して、専ら劇場の芝居を攻撃している。扇情的な筋書きや科白が善良な市民を危険にさらすなどとするのである<sup>29)</sup>。3世紀半ばカルタゴの教父キプリアヌスも演劇には拒否的である(『書簡』2)。キリスト教会の見世物嫌いは公認後も変わらなかったようで、5世紀にまとめられた『テオドシウス法典』に一連の見世物禁止ある

25) アマン『日常生活』, 84。参照, 木寺廉太『古代キリスト教と平和主義－教父たちの戦争・軍隊・平和観』立教大学出版会 2004。

26) 木寺上掲書, 第五章参照。

27) 南川高志『ユリアヌス』〈世界史リブレット8〉山川出版社 2015, 70。

28) Grant, *op. cit.* p.85。

29) Grant, *op. cit.* p.85。

いは抑制の法規がある。その15巻5に舞台でのショー、6にはMaiumaという当時まだ非キリスト教徒の間に流行していたらしい異教的な催しへの規制が定められており、以下同じ舞台に男女が登場することへの規制、戦車競走、猛獣ショー、剣闘士競技の華やかな催しへの規制、などが並んでいる。これらの法令から逆に、かかる職業に関わるキリスト教徒が絶えなかったと推測されるのである。

しかしながら、4世紀に公認され、帝国の宗教となっていったキリスト教の職業観はある程度変化していった。教会の聖職は重視され、給与制となり、免税特権も一部与えられた。帝国や地方政府の役人、そして軍人への忌避など論外となっただろう<sup>30)</sup>。すでに3世紀から、キリスト教は農村地域やそれまで浸透していなかったガリア・ブリタニア方面にも広がっており、4世紀にその動きは加速されたろうから、それまでより多様な職業の信者が増加したことになる。従ってこれをもって本稿の役割は限界を迎えることになる。

## V. おわりに

労働と職業というごく普通の日常的なことを初期キリスト教ではどのようにみていたか、ということを眺めてきた。

イエスとパウロの言葉からそのようなことに関わる箇所を取り出してみた。誠実に働くことへの評価と一般社会が見下していた職業の人々を受け入れたイエスの姿勢をパウロは受け継ぐが、自らの実践を踏まえて、より厳しい労働を督励したようにみえる。しかしその後の教会は、許容できない職業を選別し始めた。

これを、地中海世界の歴史の中において見るためにヘシオドス、プラトンなどギリシアの、キケロー、セネカからローマの思想家の労働観・職業観を断片的ながら参照して新約の見方と比べてみた。熱心な労働自体は勧めるものの、職業についてギリシア・ローマ知識人は身分的な差別意識から、大衆の職業を侮蔑的に語る傾向が明らかだった。

初期キリスト教徒のローマ帝国における存在をこれまで、都市の生活や奴隷制、皇帝観などの切り口で考察してきた。その過程で見出された特色は、キリスト教徒は多くの面で一般のローマ帝国と価値観を共有し、同じ社会生活を営んでいたというものだった<sup>31)</sup>。しかしまた多くの面で彼らは、ローマ人には異質な特色をも示すのである。民衆や当局による迫害がそのような特色ある行動をとらせることがあり、信仰から発する倫理がそれを求めたこともあった。特定の職業の忌避は、この後者の例であろうと思われる。

かなり大雑把な考察ではあるが、これをもって結びとしたい。

30) 参照、F.ティンネフェルト 弓削達訳『初期ビザンツ社会』岩波書店 1984(原著1983)。

31) R.MacMullen, What Difference Did Christian Make? *Historia* 35, 1986, 322-343.